

心を騒がせず、信じよう

ヨハネの福音書 14 章 1-11 節

はじめに

イエス様は、十字架で死なれる前夜の「最後の晩餐」の時、弟子たちのうちの一人がご自分を裏切ると打ち明けられました。そして、まもなくご自分は、弟子たちのもとからいなくなると言われたのです。そこでペテロは、「主よ、どこへおいでになるのですか、私は命を懸けてあなたについて行きます」と言うのですが、イエス様はペテロに、「あなたは、今はわたしについて来ることができない」と言われるのです。

イエス様が自分たちのもとからいなくなる、しかも自分たちはついて行くことができない、そのことを聞いた弟子たちは、激しく動揺するのです。ですからイエス様は、彼らにこう言われます。「**あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい**」。今日の聖書箇所ではイエス様は、ご自分がどこへ行かれるのかを語っています。

1. イエスは場所を用意しに行く

2-3 節で、イエス様はこう言われます。「**わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです**」。イエス様は、神様のことを父と呼びます。そのことを通して、ご自分が神の子であることを明らかにしています。イエス様はこれからどこへ行かれるのか、それは「父の家」だと言われます。つまり神様のみもとです。神様のみもとに、弟子たちのために場所を用意しに行くと言われるのです。そして場所が用意できたら、必ず弟子たちを迎えに来て、いつまでも弟子たちと共にいるようになると言われるのです。

神様のみもと、それは「天国」とも言えます。イエス様は十字架で死なれ、三日目に死からよみがえり、四十日後に神様のみもとである天国に昇って行かれます。それは、弟子たちのため、また私たちのために場所を用意しに行くためです。イエス様が十字架で死ななければ、天国に、また神様のみもとに、私たちの場所はないのです。イエス様がなぜ十字架で死なれたのか、それは、天国で、また神様のみもとでいつまでも、私たちと共にいるようになるためです。

ではイエス様はいつ、私たちを迎えに来るのでしょうか。それは、世の終わりの「最後の審判」の時です。イエス様は、世の終わりの時に、再びこの地上に来られます。その時、私たちは天国へと迎えられ、神様のみもとで、いつまでもイエス様と共にいるようになります。しかし、イエス様が私たちを迎えに来るのは、必ずしも世の終わりの時だけではありません。

せん。私たちの生涯の終わりの時も、イエス様は私たちを迎えに来られます。使徒パウロは、このように言っています。「**たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています**」(Ⅱコリント 5:1)。パウロは、私たちの地上の住まいである幕屋が壊れる時、つまり私たちが肉体の死を迎える時、天国にある神様の建物、永遠の住まいに入れられると言っています。私たちクリスチャンが肉体の死を迎える時、「天に召される」「召天する」と言います。それは、イエス様が天国へと私たちを迎えに来てくださることを意味します。私たちクリスチャンは、肉体の死を迎える時、イエス様に迎えられ、神様のみもとで、イエス様と共にいるようになるのです。

2. どうしたら神を知ることができるのか

「最後の晩餐」の時、イエス様が弟子たちのうちの一人が自分を裏切ると打ち明けられ、まもなくご自分は、弟子たちのもとからいなくなると言われた時、弟子たちは次々とイエス様に尋ねます。13章では、「あなたを裏切るのは誰ですか」とヨハネが尋ね、「あなたはどこへ行かれるのですか」とペテロが尋ねます。今日の聖書箇所では、「トマス」と「ピリポ」がイエス様に尋ねます。

5節でトマスは、こう尋ねます。「**主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか**」。トマスはここで、「道」について尋ねています。その道は、父を知る道、父のみもとに行く道です。つまり、どうしたら神様を知ることができるのか、どうしたら神様のみもと、つまり天国に行くことができるのかという問いです。イエス様は、それに対して、6-7節でこう答えます。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることにになります。今から父を知るのです。いや、すでにあなたがたは父を見たのです**」。イエス様は、「わたしが道であり、わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできない」と言われます。さらに「わたしを知っているなら、わたしの父をも知ることにになる」と言われます。イエス様という道を通らなければ、誰も神様のみもとに、つまり天国に行くことができない、イエス様を知らなければ、誰も神様を知ることができないと言われるのです。

イエス様そのものが、神様のもとへと続く「道」なのです。イエス様は、神様のもとへと続く道を教えてくれる方、というよりも、イエス様が「道」そのものなのです。私たちは、道に迷った時、誰かに目的地にどうやったら行けるのかを尋ねることがあります。その時、色々と説明してくれるかもしれませんが、何本目の道を右に曲がって、さらに突き当りを今度は左に曲がってと。しかし、口で色々と説明されるだけでは私たちは不安です。本当に間違わずに目的地に行けるかどうか、説明された道をしっかり覚えていられるかどうか不安です。ですから最も確実なのは、口で説明されるよりも、その人が目的地まで一緒に行ってくれることです。その人にたづいて行けば、目的地まで辿り着ける、それが何よりも安心な

のです。道を覚える必要はないのです。ただ目的地まで連れて行ってくれる、その人を信頼して、その人に付いて行けば、それでよいのです。それが、確実に目的地に辿り着ける方法なのです。私たちは、どうしたら神様のみもとに行くことができるのか、どうしたら天国に行けるのか、その最も確実な方法は、イエス様に信頼して、イエス様について行くことです。色々と勉強しなければならないとか、良い人間にならなければならないとかではなく、ただイエス様という方にお任せして、イエス様について行くことです。そうすれば、イエス様が確実に、私たちを神様のみもとまで、天国まで導いてくださるのです。イエス様は、神様のみもとへの行き方、天国への生き方を教えて、さあ後は自分の力でいってらっしゃいという方ではないのです。そうではなくて、神様のみもとまで、天国まで私たちと一緒に歩んでくださるのです。それが、「わたしが道である」ということの意味だと思います。私たちは、自分の力で神様のみもとに行こうとしたり、天国に行こうとしたら、道に迷ってしまいます。そうではなく、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」と言われるイエス様に信頼して、イエス様に付いて行き、イエス様と一緒に歩めば、確実に神様を知ることができ、神様のみもと、天国へと辿り着くことができるのです。

3. どうしたら神を見ることができるのか

続いてピリポは、8節でこう尋ねます。「**主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します**」。ピリポはここで、どうしたら神様を見ることができるのかと尋ねています。イエス様はそれに対して、9-11節でこう答えます。「**ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは『私たちに父を見せてください』と言うのですか。わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられると、わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい**」。イエス様は、「わたしを見た人は、神様を見たのだ」と言われるのです。なぜなら、イエス様のうちに神様がおられ、神様のうちにイエス様がおられるからです。イエス様が語る言葉も、イエス様が行う奇跡も、すべてイエス様のうちにおられる神様が語る言葉であり、神様が行う奇跡なのだとされるのです。つまりイエス様と神様は一つなのです（ヨハネ 10：30）。ヨハネ 1：18 には、こうあります。「**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである**」。イエス様は、神様を説き明かされたのです。イエス様を知れば、神様を知ることができるのです。イエス様を見れば、神様を見たと言えるのです。イエス様を信じれば、神様を信じたと言えるのです。

おわりに

イエス様は 1 節で、「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われました。ここでは、神様とイエス様の二人を信じなさいということでは

はなく、神様を信じるということは、イエス様を信じることだ、ですから、心が騒いだ時には、イエス様を信じなさいということだと思います。

「心が騒ぐ」ということは、私たちだけのことではありません。「ヨハネの福音書」を見ると、これまでイエス様も三度、「心が騒いだ」とあります。一つは 11 章で、イエス様の愛する友であるラザロが死んだ時です。もう一つは 12 章で、ご自分が十字架で死ななければならぬことを語られた時です。そして三つ目は、弟子の一人のイスカリオテのユダが、ご自分を裏切ることを語られた時です。つまりイエス様も、愛する者が亡くなった時、愛する者に裏切られた時、ご自分の死を目の前にした時、「心が騒いだ」のです。私たちもイエス様と同じように、愛する者を失った時、愛する者に裏切られた時、自分の命が脅かされた時、「心が騒ぐ」と思います。今まさに心が騒いでいる人もいるかもしれませんし、私たちもいつ心が騒ぐような出来事が襲いかかって来るかも知れません。しかし、その時に大切なのは、神様を信じ、イエス様を信じることです。つまり、イエス様に信頼することです。イエス様は、「わたしは道である」と言われた方です。イエス様に信頼し、イエス様にお任せして、イエス様に付いて行けば、必ず道は開かれるのです。

私は幼い頃から心配性で、不安の強い子でした。幼稚園に行けば、ちゃんとお迎えが来るのか、小学校に行けば、友だちができるのか、忘れ物がないか、先生から指名されたら答えられるかなど、いつも不安を抱えていました。そんな私を見かねて、母はこの御言葉を何度も読み聞かせて、暗唱させたのです。「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい」。ですから今でも、私は不安を抱えた時には、この御言葉を思い出します。心が騒ぐ時、最も確実な道は、イエス様に信頼して、イエス様に付いて行くことです。そうすれば、イエス様が目的地まで、共に歩み、私たちを導いてくださるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちとあなたは、天と地ほどの隔たりがあります。イエス様がいなければ、私たちはあなたを知ることも、あなたのみもとに行くこともできません。イエス様こそ、私たちをあなたのみもとに確実に導いてくださる方です。

私たちの人生は、心騒ぐ出来事がたくさんあります。自分の力ではどうすることもできない出来事がたくさんあります。イエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」と言われました。心騒ぐ時には、イエス様に信頼して、イエス様にお任せしていくことができますように。解決の見通しが立たない時でも、ただイエス様に付いて行くことができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。